

一、区内の概況

今から五十年以上も前、昭和三十五年（一九六〇）頃の区内全域の道路は国道三八号線（本通り）を含め未舗装の砂利道であった。加えて市街地から佐幌高台へ続く五本の砂利道は勾配があり、自転車による郵便配達は苦勞が多かった。

北新得、福山、広内、南新得の地域は小さな沢の奥まで生活道路、人家があり、特に福山は狩勝峠の下辺りまで人が住んでいて、馬車幅の沢沿いの上り道は自転車を押しての配達であった。また、国道から福山道路に入るとほぼ正面に狩勝峠を登っている列車を見ることがあり、千分の二五の勾配を喘ぎながらも力強く登る機関車のドラフト（排気）音の響きが聞こえてきていた。

大きな通りから農家への入り口には集乳缶の置き台があり、搾乳された牛乳が集乳所へ運ばれていた。出す前の集乳缶は小川などで冷却されていた。農家の住居は沢沿いなど生活用水を供給できるところに建っていた。ただ、佐幌、上佐幌は高台のため小川などが少なく水を確保するのに難儀されていた。井戸を掘ったりポンプを打ったりしていたが、量は少なく、さらにカナケが多いため良質の飲用水は充分に得られなかったようだし、牛馬に与える毎日の水の確保もたいへんだったようだ。

当時の農村地帯は佐幌、上佐幌の一部では買電で電灯生活が行われていたし、また北新得では沢を利用した水車による自家発電を行っていた家もあったが、農家の多くはまだランプの生活であった。当然電気電話の電柱は少なく農協の有線放送用の細い木柱が農家の軒先まで続いていた。農協からの情報伝達は有線放送で行われていて、このため農家の茶の間には常時つけっぱなしの有線ラジオがあった。有線からは流行歌なども流れていて農家の娯楽になっていたし、農家の情報源は日刊紙（北海道新聞、北海タイムス、日本農業新聞など）と月刊「家の光」で、日刊紙は郵便物として配達していた。当時は日曜日にも郵便配達が行われていて、毎日同じ時間帯に赤い自転車を通り、また汽車も走るので、農作業の人の時刻の目安になっていたらしい。

三十五年頃は、どの住宅にもまだ郵便受け箱とか郵便差入れ口というものもなく、家人に挨拶を交えて郵便物を手渡ししていたし、施錠している家もなかったの。不在の時は玄関の上がけに郵便物を置いてきていた。また、砂利道の自転車による作業のため、配達各区ごとに農家に依頼した休憩所が設けられていた。その頃はまだ葎葎き屋根、板張り壁の平屋住宅が

ほとんどで、農家はさらに趣のある縁側を構えているところもあって、夏だとその縁側で配達員は休憩させてもらい、街の情報などを提供していた。新得市街地は、本通り南一から三丁目、本通り北一から三丁目、さらに番外地に多くの商店が軒を連ねていた。線路から新得寺のある西側に小学校、中学校があり、三十五年の両校在籍児童数は一、六二六人で校下人口の二十五%くらいを占めていた。主な通学路となる駅北側踏切には踏切り番がいたし、もう一つの通学路である本通りから新得寺へ通じる線路（ガールド）下にも登下校の子どもの列があった。当時、新内や一部の北新得の新得中学の生徒は早朝の貨物列車の車掌室などに乗せてもらっての通学であったから冬期は親も生徒も苦勞が多かったと思う。

五十年以上も前の市街地には国鉄の各施設、鉄道官舎が多く建ち並び、新得駅からは拓鉄線の路線が鹿追町東瓜幕まであり、拓殖鉄道の本社もあって、新得は“鉄道の街”といわれ、活気があった。

市街地の通りは人の行き来が多く、馬の引く荷を積んだ保道車が往来を行っていたし、どここの街でもそうであったように地元の商店で生活用品等が賄え、商店自体の商いも成り立っていた。町全体で自給自足ができていた。日常生活は薪や石炭ストーブで煮炊きや暖をとっていた時代で、煙突からの煙が夏冬問わず街中にたなびいていた。

市街地の地形は、福山入口で水準点一九〇・二m、拓鉄近くで一八〇・六mで南北に標高差約一〇m。等高線で、小学校付近で標高二〇〇m、現在の国道近くで一八〇mで東西に標高差約二〇m。それぞれの直線距離が南北で約二・三km、東西で約一・〇kmであるから当然距離が短く高低差の多い東西に坂の多くなる地形になっている。特に本通北と一条通北の間、郵便局の裏は断崖に近い段差があった。さらに九号番外地（現在の本通北四丁目）の新得橋付近は線路、道路、佐幌川が隣接して段差をもって並び、それぞれ高さ二mくらいの石垣によつて区切られていた。この石垣には石切山から切り出されたものが使われていたという。

市街地は川に恵まれていて、南北に佐幌川、東西にペンケ、パンケシントク川、中新得川、ペンケオタソイ川が街に入り込んでいた。中新得川は、新得寺から本通りへ線路下を歩道と並んで流れ、市街地の中央部を横断、佐幌川に合流していた。当然、通りに橋（木）の多い市街地でもあった。市街地を流れる護岸のないこれら自然河川は子どもらの格好の遊び場であり、カジカ、ドジョウ、ウグイなどが多く棲息していた。五十年以上も前の新得はまだまだ自然が豊かでのどかな街であった。

二、新得郵便局

開局は新得に鉄道の開通した翌年、明治四十一年（一九〇八）四月で、平成二十四年（二〇一二年）で開局一〇四年になる。

因みに、十勝最初の郵便局は明治八年（一八七五）開設の広尾局で、新得は十七番目、屈足は二十七番目に開設されている。

昭和三十五年頃の郵便局は郵政省の組織に属していて、郵便、郵便貯金、簡易保険の三事業を全国二万の郵便局で展開していた。また、委託業務として日本電信電話公社の電報、電話交換業務、日本放送協会の放送聴取契約取次ぎ、聴取料集金業務を三事業とともに行っていた。

新得局舎は国の所有で国有（郵政省）局舎。屈足局は郵政互助会、新内局は私有（個人）、トムラウシ簡易局は私有（開拓農協）、岩松簡易局も私有（農協）で、屈足、新内は借入局舎として局舎の使用料を郵政省が払っていた。トムラウシと岩松簡易局は開拓農協と農協に事務を委託する契約なので建物の賃貸関係はなかった。

郵便局の種類として集配郵便局、無集配郵便局、簡易郵便局があり、新得、屈足、新内は配達業務を行う集配郵便局で、トムラウシと岩松簡易局は切手類の販売、小包の引受け、貯金の受払い等、窓口の一部業務を委託で請け負っていた。

新得局は局種としては特定郵便局に分類されていて、特定郵便局は規模の小さな局で全国のほとんどの局がそうであった。帯広局など大きな局は普通郵便局といわれ、十勝には十勝池田と二局だけで、帯広局は十勝の統括局として管内の職員の給与事務などを受け持っていた。ただ、特定、普通という呼称はあくまでも部内において使用されていたものである。

局長は特定郵便局長といわれ、不転勤制度によって当該局長になると原則転勤できないことになっていた。当時の明神文太郎局長は二十九年（一九五四）局長に昇任して赴任、三十五年（一九六〇）六月まで新得局長であった。後任は高杉千秋が帯広局から着任した。

新得郵便局長の下に局長代理（二名）↓主事（二名）↓主任（六名）↓当務者（二十六名）の指揮命令系統があった。身分は国家公務員であったが、当時の職員採用方法は縁故による地元採用がほとんどであった。

三十五年頃は馬そりによる冬山造材が盛んで、冬期間の出稼ぎで新潟、富山などから作業に従事する農家の人たちが多く来ていた。稼ぎを仕送る人たちが当時の郵便窓口は混み合っていたし、家族との小包の発着も多かった。

新内局は、四十一年（一九六六）十月新狩勝線開通に伴い廃局となり、新得局に統合された。岩松簡易局は、五十六年（一九八一）十月戸数減少により廃局となった。また、委託業務の電話交換は四十四年（一九六九）三月、それまでの電話交換手の手動による接続からダイヤル式自動に交換化され、この効率化により職員十六名が配転、退職した。

（一）町内三局の受持ち戸数、人口

局別	区域	戸数	人口	備考
新得	市街地	一、〇九六	四、七〇五	
	南新得	五二	三二五	
	広内	一八三	九二八	種畜場公宅含む
	福山	五〇	二七一	福山小学校校宅含む
	北新得	五九	三三三	
	上佐幌	一〇〇	六四四	上佐幌小学校校宅含む
	佐幌	一一一	七〇〇	佐幌小学校校宅含む
	小計	一、六五一	七、九〇六	
新内		七〇	三八一	
屈足		九九九	四、七七六	
新得町		二、七二〇	一三、〇六三	

☆新得、新内局は保存資料に基づいた三十五年の計数であるが、屈足局にはこの資料の保存がなく、当該年の町の戸数、人口から逆算して屈足分を算出している。

（二）三局の職員数

局別	職員数	男	女
新得	三七	一一	一八
新内	七	三	一
屈足	二一	七	九

（三）委託業務の受持ち件数

局別	電話加入数	NHK契約数(テレビは白黒)			
	加入数	普及率	ラジオ	テレビ	テレビ普及率
新得	一七四	一〇・一%	一、一九一	一五八	九・六%
新内			四五	一三	一八・六%
屈足	一〇七	一〇・七%	資料なく契約数不明		

*（一）（二）（三）までの計数は昭和三十五年（一九六〇）四月一日現在である。

（四）郵便配達作業等

配達作業は十の配達区に分け、日曜日にも郵便配達を行っていて年中無休。市内区は朝までに到着、引受けた郵便物を午前、それ以後のものは午後と、一日二回配達していた。

当時の郵便局にはまだ車両の配備がなく、配達作業の機動力は自転車であった。砂利道の町道や農道には坂が多く、自転車への負担が大きく、作業柄乗り降りが激しいため特にサドルのバネの損傷が多くあった。市外区の

配達途中でサドルの破損とパンクは現在のような連絡方法のない頃だったのでそこから自転車を押しての配達になり配達員泣かせであった。また、冬期間は郵便物の入った大きな補助袋(リュックザック)を背負って馬そり道を辿り、馬そり道のないところは担いできたスキーを着けての配達であった。

新得局の機動車(自動二輪車)配備が本格化したのは三十九年(一九六四)からで、三十五年頃の町内にはまだ自家用乗用車はほとんどなく、四輪車を保有していたのは日通、横山産業、卸し市場などであった。

(五) 集配受持ち区域

市内	一区	市街地の南二丁目通りから北側、番外地、学校通り
市内	二区	市街地の南二丁目通りから南側、拓鉄、線路西側西一線
市外	一区	新得橋から北、基線六三公住、福山 *福山小
市外	二区	西二線から西側広内、種畜場
市外	三区	南新得
市外	四区	佐幌三号道路から南
市外	五区	佐幌三号道路から北、七号道路まで、*佐幌小
市外	六区	佐幌七号道路から上佐幌一五号道路まで、*上佐幌小
市外	七区	北新得(一四区の一部、一五区)
請負区		上佐幌一五号道路から北

冬期間は一区増区された。請負区は通年請負で三十五年頃は湯浅勝義(湯浅亮前町議会議長の父)と請負契約を締結していた。

(六) 郵便差出箱(ポスト)の設置場所

- 市内区Ⅱ局前、駅前、森本商店、石井商店、末広屋商店
- 市外区Ⅱ宮崎商店(広内)、石畑久成宅(佐幌三号)、湯浅貢宅(上佐幌基線)

三、郵袋受渡し拠点の新得局

昭和三十五年頃の新得駅は客車の全便停車駅であり、客車に連結した郵便車への郵袋(郵便物の入った袋)の積み卸し作業と拓鉄への郵袋託送作業を新得局が行っていた。郵便車には鉄道郵便局の職員が乗務していて、根室本線の拠点局である富良野、新得、帯広、十勝池田局との受渡し作業を行っていた。日中の各駅停車の場合は、各駅でそれぞれの郵便局が郵便車の乗務員へ積み卸し作業を行うが、夜間等通過駅となる芽室から幾寅間の沿線各局の郵袋は一旦新得局に持ち込まれ、あらためて各駅停車の郵便積み替えられていた。

局と駅間の郵便運送はリヤカーで行っていたが、年末年始の繁忙期になると往復を繰り返し、持ち込まれた郵袋で郵便事務室は足の踏み場もない

ほどだった。新得局へ持ち込まれた郵袋は、次便に積み替える郵袋、各駅停車の局へ送る郵袋の処理作業を行い、さらに開披した郵袋から取り出した郵便物の区分作業を行っていた。

新得局は郵袋受渡しの拠点として周辺十五局を受け持っていた。現在の郵便番号の三けた部分は親番号といわれ全国の大規模局、あるいは拠点局ごとに付定されていた。新得局の「〇八一」はその拠点局としての名残りである。

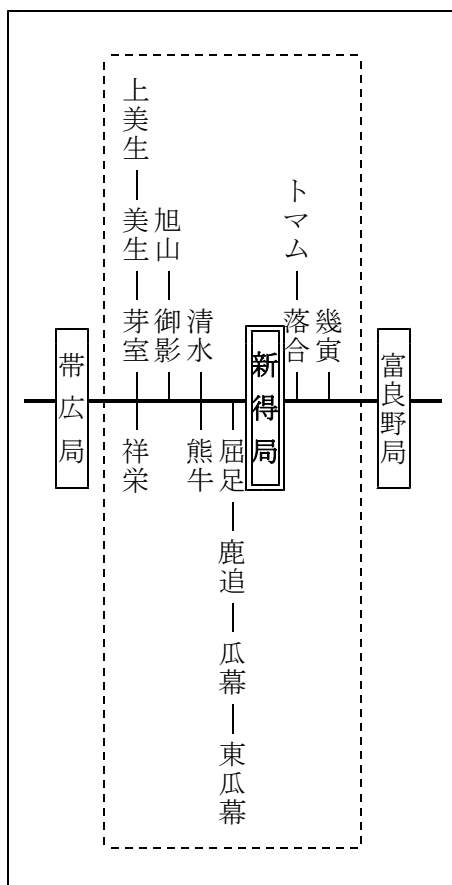
新得局は、「列車受渡便」表のとおり郵便車が夜間に集中しており、これに対応するため夜十時の出勤時間があつた。夜十時の出勤時間は郵政省の就業規則にあつたが、実際に運用していたのは全国で新得局が一局のみであった。

また、駅構内における郵袋の取り扱い「上り便」の時は跨線橋を渡って二番ホームへ持ち運ぶ規則になっていたが、実態として何十個の郵袋を跨線橋を渡すことはできなかったので駅側の黙認により列車通過後に線路を渡って郵袋を運んでいた。

四一年(一九六六)、拓鉄線新得―東瓜幕間の営業区間縮小に伴い、同区間の郵袋取扱い託送業務は廃止され、自動車便に切り替わった。

さらに、鉄道による郵袋の受渡しは、五十四年(一九七九)八月の輸送方式改廃により全国的に専用自動車便に切り替わり、新得局の拠点局としての役目も終わった。

(二) 郵袋受渡し受持局



(二) 列車受渡便

新得駅受渡時刻	郵便車便名	郵袋受渡区間	備考
〇時三〇分頃	滝川上2便	鉦路―滝川間	備考
一時一五分頃	滝根上便	根室―滝川間	急行「まりも」
二時三〇分頃	滝根下便	滝川―根室間	同右
四時頃	滝川下1便	滝川―鉦路間	同右
五時台	新東下1便	新得―東瓜幕間	託送(拓鉄委託)
七時台	幾新上便	新得―幾寅間	託送(駅委託)
九時台	滝川下2便	滝川―鉦路間	
一三時台	滝川上1便	鉦路―滝川間	
一三時三〇分頃	新東上1便	東瓜幕―新得間	託送(拓鉄委託)
一五時台	新東下2便	新得―東瓜幕間	同右
一八時台	新東上2便	東瓜幕―新得間	同右
一八時三〇分頃	幾新下便	幾寅―新得間	託送(駅委託)

四、委託業務(電報の送受信と配達)

電信中継局の清水局と電報の送信、受信を行っていた。清水局は中継親局の鉦路報話(電報電話局)へ、鉦路は全国の報話局に中継していた。三十二年(一九五七)頃まではモールス通信によって送受信が行われていたが、その後は、専用電話回線により「和文通話表」を使って行っていた。新得局の電信用和文タイプライターは「カナ」打ちで、「朝日のア」のように一文字一文字読み上げ、さらに道銀、市場など商売取りきで打電されるものは、反復して確認し誤謬のないように正確を期していた。電報の電文文字数が多いと当然料金が高くなるので取引きなどでは文字数を少なくする工夫がなされていた。たとえば「ウナヘンマツ」は、「ウナ」は至急で「至急返事が欲しい」という内容になるし、あらかじめ決めている暗号で文字数を少なくして発信する会社もあった。

五、新得局舎の変遷等

新築等年月日	所在地	敷地面積	建物形態	床延べ面積
明治四一年 四月開局	本通南一丁目に設置	不明	不明	
大正一一年 〇月新築	一条南一丁目に移転	七九二・〇〇㎡	木造平屋建て	一八三・七八㎡
大正一一年 二月新築			木造モルタル平屋建て(平面略図次ページ)	三二八・二八㎡
昭和三二年 八月新築			鉄筋コンクリート一部二階建て	五五一・〇〇㎡
五六年 一月新築				

大正一一年、昭和五六年築は町史百年史にそれぞれ局舎写真が掲載されている。

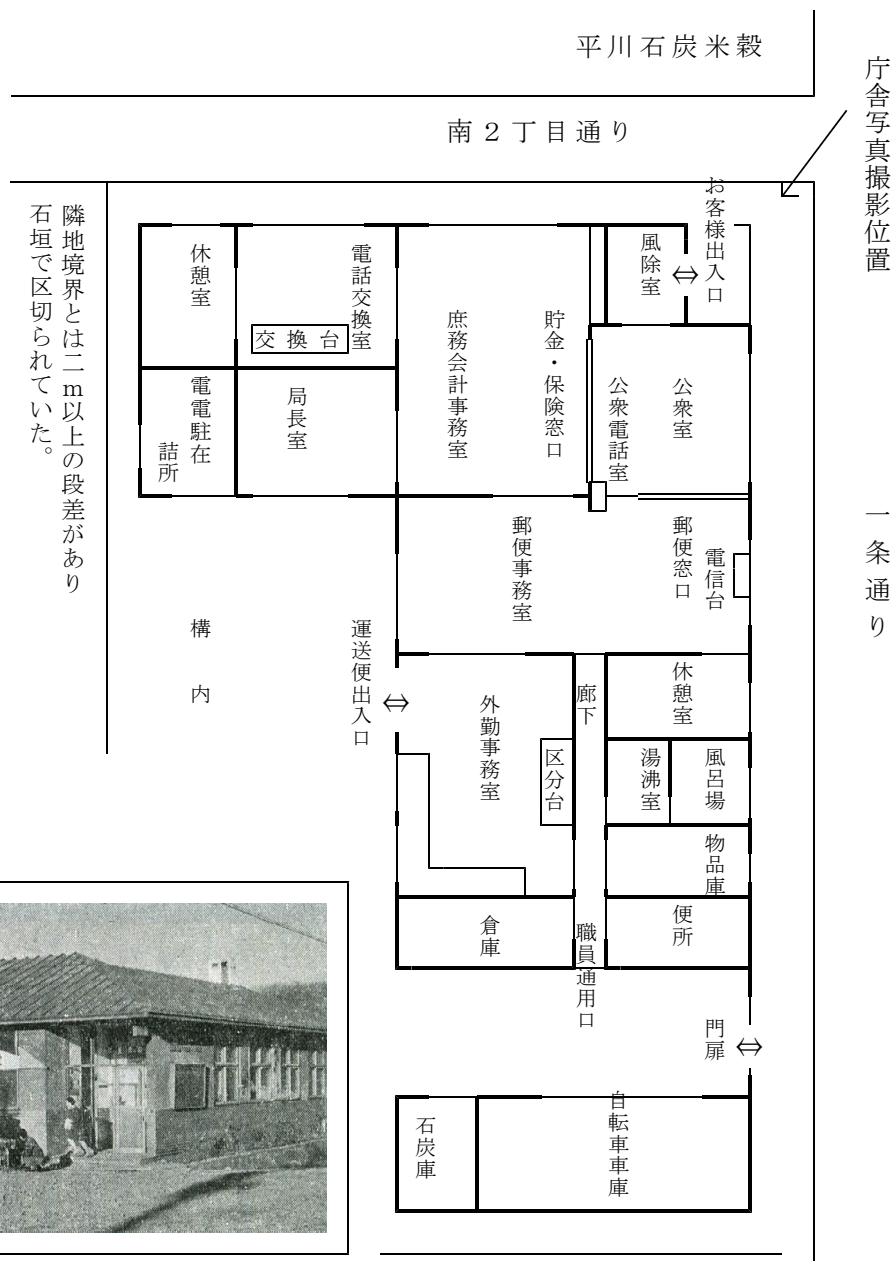
電報は二十四時間配達体制で、深夜の配達料金は割増になっていた。冬の深夜の新内方面(造材飯場など)あての電報は徒歩の配達になり、帰りは夜明けになることもあって困難を極めた。なお、新内局は小規模局のため電報配達を行っていなかった。

和文通話表(無線局運用規則)

ア	朝日のア	カ	為替のカ	サ	サクラのサ
イ	イロハのイ	キ	切手のキ	シ	新聞のシ
ウ	ウサギのウ	ク	倶楽部のク	ス	スズメのス
エ	英語のエ	ケ	景色のケ	セ	世界のセ
オ	大阪のオ	コ	子どものコ	ソ	ソロバンのソ
タ	タバコのタ	ナ	名古屋のナ	ハ	葉書のハ
チ	千鳥のチ	ニ	日本のニ	ヒ	日高のヒ
ツ	鶴亀のツ	ヌ	沼津のヌ	フ	富士山のフ
テ	手紙のテ	ネ	ネズミのネ	ヘ	平和のヘ
ト	東京のト	ノ	野原のノ	ホ	保険のホ
マ	マツチのマ	ラ	ラジオのラ	ン	お終いのン
ミ	三笠のミ	リ	リンゴのリ	ト	濁点
ム	無線のム	ル	留萌のル	ド	半濁点
メ	明治のメ	レ	礼文のレ	。	長音
モ	モミジのモ	ロ	ローマのロ	、	区切り点
ヤ	大和のヤ	ワ	わらびのワ	ー	段落
ユ	弓矢のユ	ヰ	井戸のヰ	（	下向き括弧
ヨ	余市のヨ	エ	カギのあるエ	）	上向き括弧



昭和三十二年（一九五七）建築の局舎平面略図（間取り図）と庁舎写真



宮城屋旅館

さらに伝え残しておきたいこと

☆三十五年頃の所得駅二番ホームに売店を兼ねた「立ち食いそば」があった。鈍行の停車時間に多くの乗客が下車して食べていたが、地下食堂のそばの旨いのは「通」の間では評判だった。新得で受渡しする鉄道郵便局の乗務員は滝川一帯広間を担当していたが、乗務員たちも所得のそばの評判を知っていた。新得局員は「下り便」の時に頼まれて、翌日の帰りの「上り便」でそばを鉄道乗務員に手渡していた☆「そばどころ新得」は最近の話だが、郵便局では四十年代から新そばを使った「そば会」をやっていた。日曜の朝からそば打ちをはじめ、構内に薪ストーブを設置してゆでたり、構内に薪ストーブをたき、郵便局界隈ではちよつと知られた秋の風物詩であった☆この農家でササとワトリ、犬などは放し飼いで、エサを与えなくても家の周りでミミズやなにかを食べていた。ただ、犬の中には噛みつくのがいて馴染みのない郵便配達員が配達に行った時は被害にあった☆三十年代の郵便局の年末は、十二月月上旬は歳暮などの小包の引受け、十五日以降は年賀ハガキの区分、小包の配達等で繁忙をきわめた。特に、内地からの出稼ぎの人たちがアキアジを歳暮などで送るのが多く、これをアキアジ専用箱に入れ長い郵袋に一本づつ入れ内地あてに発送していた☆三十五年頃の荷物の輸送方法は大きい物は鉄道の小荷物、小さい物は郵便局の小包しかなく、当時の運輸省と郵政省の寡占であった。